

助詞「へ」の受ける語についての一考察
—場所から人物への拡張—

大阪大学大学院文学研究科博士後期課程 3 年 黒星^{くろぼし}淑子^{しょうこ}

0. はじめに

本発表の目的は、「へ」の受ける語が場所を示す語から人物を示す語を取るまでの通史的過程を明らかにすることである。調査対象とする「へ」は、名詞句の直下に接続し、下に動詞が続くものである。以下よりは助詞の上に接続する名詞句を上接名詞句、助詞の下に係っていく動詞に係る動詞とする。

1. 先行研究と問題点

現代日本語では、「へ」は「京都へ行く」「友人へ知らせる」などのように目標対象として場所と人物とのいずれもとることができる。しかし奈良時代における「へ」では人物を示す語を取る用例は確認されない。このような違いを含め、上接名詞句においては明らかにされていない問題も残されている。

人物を示す語の出現について記述があるのは此島 (1956) である。そこでは「「与える」「告げる」系統の動詞に対してはその動作の向けられる人を表わす語が用いられるようになる」としてその語の出現を認める。黒星 (1997) は中世期の和文資料を対象として、人物を示す語を取る用例を調査し、「へ」と待遇表現との関与を推測した。白井 (1997) では、キリシタン資料に限定し「「へ」格が「待遇表現の標識が生じた結果 (p.51)」と記述する。

本調査は以下の二点を問題点として行う。

- ・「へ」の上接名詞句の通史的な拡張過程が明らかにされていない。
- ・待遇表現との関与に関しては推論に留まり、更なる検討がなされていない。

以下より第 3 節では覚一本平家物語における「へ」と「に」の違いを確認する。その上で「へ」の上接名詞句と待遇表現との関係を検討する。第 4 節では「へ」の上接名詞句が人物を示す語を取るまでの過程を通史的に辿る。第 5 節にてまとめと考察を述べる。なお、調査に際しては「へ」と「に」の対比を中心に行う。「に」は始めから人間を指す名詞句を取る用法が確立していたのに対し「へ」はそうではなく、場所名詞から人間名詞へと拡張させる過程を持つ。従って「へ」と「に」とが共存する状況の中で両者の対比を行うことは、「へ」の用法を知る上で有益だと考えるためである。

2. 調査方法

覚一本平家物語を対象として、発話動詞を取る「へ」と「に」の比較調査を行う。その上で両者の違いを明らかにすると共に待遇表現との関与について更なる検討を試みる。

通史的用例の抽出には日本語歴史コーパス (CHJ) を用い、発話動詞を取る「へ」の上接名詞句の拡張過程を辿る。

2.1 調査手段と調査基準

用例の抽出

平家物語として調査対象とするのは日本古典文学大系所収の覚一本平家物語である。それは今回調査した資料の中で最も多くの用例数が確認されたことによる。奈良時代から鎌倉時代までの資料には国立国語研究所『日本語歴史コーパス』(CHJ)を用いる。

語の分類

上接名詞句の分類

覚一本平家物語などでは「小松殿」や「其御方」のような人物と場所とのいずれにも用い

られる語が含まれる。よって人物であるか場所であるかの分類に際しては主に以下の基準のもとに行う。参考として日本古典文学体系の頭注、解釈を用いる。

人物を示す語として判断する基準と用例

(i) 人に対して行われる動作・行為を表す動詞や発話動詞に係る名詞句。

(ii) 主従関係や親族関係を示す用例、及び人の属性を示す名詞句。

(例) ・ 小督殿は琴ひき給ひしぞかし。(覚一本平家物語上巻 p.396)

・ 法住寺殿の御子なり。(同書上巻 p.92)

場所を示す語として判断する基準と用例

(iii) 「行く」「帰る」のような移動動詞、及び存在動詞を取る名詞句。

(例) ・ 法皇は院の御所法住寺殿へ御幸なる。(同書上巻 p.423)

・ 小松殿へぞ帰られける。(同書上巻 p.162)

係る動詞の分類

敬語表現として見た場合、上位主体語と下位主体語とに分類¹する。

「に・へ」格名詞句>主体 「に・へ」格名詞句<主体 (「>」「<」待遇差を表す)

3.1 覚一本平家物語

覚一本平家物語において、人物と建造物との何れにも用いられる語は、「殿」「宮」「院」「御方」である。これらの語について分類を試みた結果、人物を示す語として判断したのは「人物」の数値となる。

表1 覚一本平家物語「殿」「女院」「宮」「御方」の分類(人物を示す割合)

	人物	建造物	方向	計
御方	21 (87%)	1	2	24
女院	57 (100%)	0	0	57
宮	72 (86%)	11	0	83
殿	29 (100%)	0	0	29
殿(接尾語)	611 (87%)	84	0	695

表の説明: 分類した項は、「人物」は人物を示す語、「建造物」は建造物を示す語、「方向」は方向を示す語。(小数点以下切り捨て。以下表中の割合は同様とする。)

3.1 「へ」と「に」の違い

3.1.1 上接名詞句

発話動詞を取る「へ」において注目されたのは場所を示す語の出現数である。「へ」では33 例中 17 例に場所を示す語が確認される。しかし、「に」では 71 例中 1 例に留まる。

場所を示す語

「へ」上接名詞句 都 大宰府 関東 鎌倉 福原 内裏 院御所 衆徒の御中
平大納言のもと

「に」上接名詞句 安藝

表2 覚一本平家物語 上接名詞句(人物を示す語)

	建造物 接続	建造物 非接続
へ	14	2
に	12	59

具体例を見ると、「に」の 1 例は場所を示すと同時に信仰の対象を表す。この場合の上接名詞句は、「祈り申す」対象そのものである。(カッコ内は巻・ページ数)

(1) わがあがめ奉る安藝の厳島に申さんとて、月まうでを始めて、祈り申されければ、中

¹ 辻村 (1968) では敬語の語種を上位主体語 (敬称) 、下位主体語 (謙称) 、美化語、対者敬語に分けてある。(敬語一覧表 pp.364-400)

宮やがて御懷妊あ(ッ)て、思ひのごとく皇子にてましましけるこそ目出たけれ。抑平家の安藝の嚴島を信じ始られける事はいかにといふに、鳥羽院の御宇に、清盛公いまだ安藝守たりし時、安藝國をも(ッ)て、高野の大塔を修理せよとて、渡邊の遠藤六郎頼方を雜掌に付られ、六年に修理をは(ソ)ぬ。(上 223)

一方、「へ」の場合に表された用例は、「申す」最終目標として人物が想定される。

(2) 飛脚をもって此由都へ申たりければ、平家の人々大にさはがれけり。(上 426)

(3) 聖いとおしくおもひ奉て、出家せさせ奉り、東大寺の油倉といふ所にしばらくをき奉て、関東へ此よし申されけり。(下 416)

(2)「都へ」では「平家の人々」、(3)「関東へ」は宗実の処遇を巡り頼朝へ意向を伺うことを表す。具体例を見ると、「に」では上接名詞句は「申す」目的そのものであるが、「へ」での上接名詞句は「申す」最終目的の所在する場所であり、両者の違いは明らかである。

3.1.2 係る動詞

覚一本平家物語において抽出された発話動詞は、上位主体語と下位主体語とに分ける。

下位主体語 申す 申し上ぐ 伺ひ申す 申し置く 奏す 奏聞す

上位主体語 仰す 仰せ合はす 仰せ付く 宣ふ 宣ひ合はす

「へ」の用例では下位主体語に偏る傾向が見られる。

表3 覚一本平家物語 係る動詞

	下位主体語	上位主体語
へ	29	4
に	28	43

この偏りを見ると、「へ」と待遇表現との関与も推測される。この点について改めて検討する。

3.2 待遇表現との関係

まず係る動詞として発話動詞を取る用例において表された人物を示す語を挙げる。

表4 覚一本平家物語における「へ」と「に」 上接名詞句 (人物を示す語)

へ	《地位・役職・身分》(全16例) 法皇2 殿下 大臣殿 北大納言佐殿 法性寺殿 鳥羽殿 鎌倉殿 小松殿2 八条女院 宮の御方 其御方 平家の君達の方々 平家 公家
に	《地位・役職・身分》(全50例) 入道殿 小松殿 大臣殿2 鎌倉殿2 三位殿 女院 八条女院 九郎御曹司2 公家 入道相国2 宰相2 判官 平大納言 大将 座主 祇園別当 浄憲法印 佛所の法印 李廣と云將軍 山の座主・寺の長吏 明雲大僧正 高僧貴僧2 太政大臣…大納言忠親卿 大仏の聖俊乗坊 大進僧正覚宗 君 母上3 乳母の女房2 二人の女房 武士2 諸卿 山門の大衆2 守護の武士2 侍共3 東国の軍兵ども 《役職+人名》(全6例) 権大僧都澄憲 飛驒守景家・築後守貞能 権少輔頼春 左少弁兼光 小胡麻郡司織維 岡辺権守泰綱 《人名》(全7例) 中原範貞 土肥次郎 瀬尾太郎兼康 安判官資兼 伊豆藏人大夫頼兼 北條 木曾 《その他》(全8例) 侍一人 仕らんずる仁 他人 近習の人々 才人等 人々2 いきたる人

下線：建造物及び方向を示す語の接続形式を取る語

上記の用例を見ると、「へ」の用例では身分・地位において高位人物への偏りが認められる。それは係る動詞が下位主体語への偏りを示した結果に繋がる。しかし語形に着目した場合、最高位人物を表わす語と敬称として挙げられた語には、「殿」「院」「方」のような建造物や方向を示す語が含まれるとも言える。(以下、西田(1990)²より抜粋)

最高位に位置する人物 院(上皇・法皇) 女院 宮 后

人物に対する敬称 殿下 一公 一卿 一殿 一御前 一御房 一御方

そこで上接名詞句の人物を示す語において、建造物、及び形式名詞の接続と非接続の

² 西田(1990)では、覚一本平家物語における敬語の様相を示される。

違いが「へ」と「に」の違いと関連性が認められるか否かについて、フィッシャーの直接確率検定により検定を試みた。その結果、 P 値 <0.01 として有意差が確認された。つまり「へ」と「に」の違いと建造物の接続形（建造物接続）と接続のない語形（建造物非接続）の違いには統計的に有意差が見られたのである。ただ係る動詞において、「へ」が下位主体語に偏る傾向が見られたことからすると、待遇表現との関与も全く否定されるものではないことになる。そこで建造物や形式名詞がどのように関わってきたのか、次節にて通史的な流れを確認する。

4. 「へ」の通史的拡張

4.1 人物を示す語への通史的拡張

上接名詞句として建造物を示す語は平安時代初期から認められる。以下、鎌倉時代までの用例を見ていく。以下、形式名詞の接続形を含めて建造物接続形と記す。

I 奈良時代

奈良時代における「へ」では係る動詞として移動動詞を取る。その上接名詞句として出現する語に建造物を示す語は確認されない。

上節名詞句 国 唐国 日本 難波 天 吉野 新羅 都 桜田 里
 筑紫 沖 佐保の内
 係る動詞 行く 入る 越ゆ 渡る 下る 上る 遣る 沈く

II 平安時代

発話動詞の出現以前

上接名詞句として「殿」「宮」などのように建造物と敬称との二つの面を併せ持つ語は、平安時代より見られるようになる。この段階では、係る動詞として移動と存在とを表す動詞を取る。(以下、カッコ内は資料名・ページ数を示す。)

(4) 「龍の頸の玉をえ取らざりしかばなむ、殿へもえ参らざりし。 (竹取物語 48)

(5) 「おなじうは院へまゐらむ」とて、ののしりて出でられぬ。 (蜻蛉日記 289)

(6) 年ごとの桜の花の花ざかりにはその宮へなむおはしましける。 (伊勢物語 183)

この段階は、係る動詞として移動と存在とを表す動詞を取るものであることから、上記の語は建造物を示す語として判断される。

発話動詞の出現以降

発話動詞の上接名詞句では、場所を示す語と形式名詞に加えて建造物「殿」の接続形を取る「大将殿」を確認した。(表中カッコ内の割合は小数点以下切り捨て。以下、全て同様に示す。)

(7) 「中堂より麝香賜はりぬ。とくかしこへつげよ」といふ人あるに (更級日記 340)

(8) 御返事はもろともに言ひあはせて、大将殿へ聞こえたまふ。 (落窪物語.297)

(9) 少将、兵部のもとへ、「かの聞こえしことは今宵なり。亥の刻ばかりにおはせよ」とのたまへば (落窪物語 154)

表5 建造物接続形の人物を示す割合

	人物を示す用例	建造物を示す用例	合計
落窪 (殿)	40 (50%)	39	79
(大将殿)	25 (86%)	4	29

III 鎌倉時代

鎌倉時代には、発話動詞「申す」を取る用例において人物の属性を表す語を取る用例も確認されるようになる。

(10) 春宮大夫言はるれば、「東二条院より、『歌ばし召さるな』と准后へ申されけるよ

し、うけたまはりし」など申して、 (とはすがたり 414)
 建造物を示す語とした中にも人物を示す語としての比率の低いものがある。その場合にも、
 人物を示す語としての用例は確認された。

表6 建造物接続形の人物を示す割合

	人物を示す用例	建造物を示す用例	合計
宇治 (院接続)	25 (89%)	3	28
とはず (殿接続)	60 (76%)	18	78
(御所)	32 (24%)	97	129

最後に、上記のような「へ」と「に」との違いが平安時代から覚一本平家物語に繋がるのか、この点について検討する。

I 平安時代から鎌倉時代の拡張

本調査で発話動詞を取る用例が確認されたのは落窪物語 (973 年)、更級日記 (1060 年頃)、宇治拾遺物語 (1243 年)、とはすがたり (1306 年以降) 以上の資料である。この資料における「へ」と「に」の用例数を比較する。(上接名詞句として場所を示す語を取る用例は扱わない。)

係る動詞ー下位主体語と上位主体語ー

係る動詞では、「へ」は下位主体語への偏りが見られる。

表7 落窪物語・更級日記・宇治拾遺物語・とはすがたり 係る動詞の分類

		下位主体語		上位主体語		ほか					下位主体語		上位主体語		ほか		
		申す	聞こゆ	仰す	宣ふ	告ぐ	語る	言ふ			申す	聞こゆ	仰す	宣ふ	告ぐ	語る	言ふ
落窪	へ		1						落窪	に	6			1		4	4
更級	へ								更級	に	1					2	2
宇治	へ	1							宇治	に	6		3	1		13	20
とはず	へ	11							とはず	に	5		4				7

空欄: 数値「0」を示す

上接名詞句ー建造物接続と非接続ー

上接名詞句では、とはすがたりにおける「へ」と「に」の違いとして有意差 (危険率 1%) が認められるとの結果を得た。

表8 落窪物語・更級日記・宇治拾遺物語・とはすがたり 上接名詞句(人物を示す語)

		建造物接続	建造物非接続			建造物接続	建造物非接続
落窪	へ	1		落窪	に	3	12
更級	へ			更級	に	1	4
宇治	へ	1		宇治	に	3	40
とはず	へ	10	1	とはず	に	1	15

空欄: 数値「0」を示す

5. 調査結果と考察

調査結果

覚一本平家物語における「へ」と「に」の比較

- ・「へ」では上接名詞句と係る動詞との何れにも「に」とは異なる傾向が見られた。上接名詞句では建造物接続と非接続の違いに統計的に有意差が確認される。
- ・建造物を示す語の多くは敬称と同形である。

「へ」の通史的調査

- ・奈良時代、上接名詞句には国名や地名など、場所を示す語を取るが、建造物の用例は確認できない。係る動詞として移動動詞を取る。
- ・平安時代、上接名詞句として建造物接続形が確認されるようになる。係る動詞では建造物接続形の出現と共に、発話動詞を取る用例が確認される。

- ・鎌倉時代、発話動詞を取る用例において、上接名詞句として人の属性を表す語を取る用例が確認される。

このように「へ」の通史的な流れを見ると、係る動詞では移動動詞から発話動詞を取るという過程があり、一方上接名詞句では場所を示す語から建造物を示す語、そして人物を示す語への拡張が確認される。そして建造物接続形が人物を示す語として用いられていたことも確認された。つまり、この建造物接続の語は、場所を示す語であると同時に人物を示す語であるという二面性を持つことになる。この建造物接続形が人物を示す語として用いられるのは婉曲用法ゆえのものと言えるものである。また、これが間接的表現であるため、待遇表現と結びつきやすいという点も考えられる。とすると覚一本平家物語において待遇表現に通じる結果が得られたのは、この建造物を示す語の持つ二面性が「に」との待遇差を生じさせる要因になったのではないかと考えられる。

助詞「へ」の拡張を考える場合には、それが係っていく動詞の拡張を考えるだけでなく、その受ける名詞句が、場所を示す語から人を表す名詞句へと拡張する過程において人と場所との両方を示すことができる建造物を表す名詞句が介在しており、それ故にまた「に」と比較して「へ」の上接名詞句がより高位人物に偏るように見えたという効果をも生じさせたのだと仮定できる。助詞の通史的拡張を考える際には、このように係る動詞と上接名詞句の両方の相関関係を明らかにすることが重要だと考える。

参考文献

- 青木伶子 (1956) 「「へ」と「に」の消長」『国語学』24 pp.107-120, 日本語学会
- 石垣謙二 (1955) 「助詞「へ」の通時的考察」『助詞の歴史的研究』 pp.55-80, 岩波書店
- 江口正弘 (2000) 「『天草版平家物語』の「へ」と「に」について」『尚絅大学研究紀要』23 pp.73-85, (同 (2003) 『語意の解釈がゆれる中古語と中世語の考察』笠間書院 pp.198-252, 所収)
- 蒲原淑子 (1991) 「格助詞「へ」と「に」の消長についての一考察」『平家物語』を中心として一 国語学会発表要旨『国語学』166
- 金水敏 (1989) 「敬語優位から人称性優位へー国語史の一潮流ー」『女子大文学』40 pp.1-17, 大阪女子大学国文学研究所
- 黒星淑子 (1997) 「〈人物〉を受ける「へ」について」『語文研究』84, pp.39-56, 九州大学
- 此島正年 (1966) 『国語助詞の研究』 pp.85-100, 桜楓社
- 白井純 (1997) 「キリシタン文献における「に」格と「へ」格ー待遇表現の標識についてー」『国語国文研究』106 pp.50-6, 北海道大学国語国文学会
- 辻村敏樹 (1968) 『敬語の史的研究』 pp.58-60, 東京堂出版
- 西田直敏 (1978) 『平家物語の文体論的研究』 pp.186-230, 明治書院
- 西田直敏 (1990) 『平家物語の国語学的研究』 pp.300-335, 和泉書院
- 山田孝雄 (1967) 『平家物語の語法』 pp.113-123, 宝文館出版 第一刷 (1954)

参考資料

国立国語研究所『日本語歴史コーパス・中納言 (CHJ)』奈良時代編・平安時代編 (古今和歌集を除く)・鎌倉時代編・室町時代編 <https://chunagon.ninjal.ac.jp/> (2020年1月12日最終確認) / 『和泉式部日記 紫式部日記 更級日記 讃岐典侍日記』 (2014) 新編日本古典文学全集 小学館 / 『宇治拾遺物語』 (2017) 新編日本古典文学全集 小学館 / 『大鏡』 (2004) 新編日本古典文学全集 小学館 / 『落窪物語 堤中納言物語』 (2017) 新編日本古典文学全集 小学館 / 『建礼門院右京大夫集 とはづがたり』 (2008) 新編日本古典文学全集 小学館 / 『源氏物語』 (2015) 新編日本古典文学全集 小学館 / 『十訓抄』 (2013) 新編日本古典文学全集 小学館 / 『竹取物語 伊勢物語 大和物語 平中物語』 (2017) 新編日本古典文学全集 小学館 / 『土佐日記蜻蛉日記』 (2015) 新編日本古典文学全集 小学館 / 『萬葉集』 (2006) 新編日本古典文学全集 小学館 / 『平家物語上・下』 (1985) 日本古典文学大系 岩波書店 / 『平家物語全註 上～下二』 (1986) 富蔵徳次郎 角川書店